



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	発達障害を持つメンバーとの長期にわたる関わり：心理的居場所としての「ごぶサタ倶楽部」
Author(s)	渡辺，隼人；蒔苗，詩歌；室橋，春光
Citation	子ども発達臨床研究，9，41-45
Issue Date	2017-03-15
DOI	https://doi.org/10.14943/rcccd.9.41
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/65011
Type	departmental bulletin paper
File Information	41_1882-1707_9.pdf



発達障害を持つメンバーとの長期にわたる関わり

— 心理的居場所としての「ごぶサタ倶楽部」—

渡辺 隼人* ・ 蒔苗 詩歌** ・ 室橋 春光***

Long-term interaction between volunteers and members with developmental disabilities — “Gobu-Sata” club as psychological own-space —

Hayato, WATANABE*, Shiika, MAKINAE**
Harumitsu, MUROHASHI***

要 旨

ごぶサタ倶楽部は北大土曜教室を前身とした集まりで、発達障害を持つ青年・成人と長期にわたる交流を継続している。およそ10年間の活動を通してごぶサタ倶楽部の活動形態は変化してきた。そこで本稿では、ごぶサタ倶楽部設立から現在までを3つの時期に区分し、それぞれの時期でどのような活動を行っていたのかを整理した。(1)北大土曜教室の一部としてのOB会が発足した時期、(2)北大土曜教室の外部組織として「ごぶサタ倶楽部」が設立した時期、(3)北大土曜教室終了後から現在までについて、それぞれの時期の活動内容とその時期のごぶサタ倶楽部の役割に関して検討した。ごぶサタ倶楽部には全時期を通して「ゆるさ」という特徴があり、この「ゆるさ」こそがごぶサタ倶楽部ではメンバーやボランティアとの長期にわたる交流を支え、彼らの居場所を構成することに寄与していると考えられる。

キーワード：発達障害、長期の関わり、居場所

1. ごぶサタ倶楽部の沿革

ごぶサタ倶楽部は「北大土曜教室」を前身として、当時のスタッフおよび子ども(以下メンバー)が定期的に交流を続けている集まりである。ごぶサタ倶楽部の活動形態は、時期によって変化して

おり、以下では三つの時期に分けてまとめる。

【初期：北大土曜教室の一部としてのOB会】

北大土曜教室は、2001年度より北海道大学教育学部カリキュラムに「発達障害援助実習」として組み込まれて行われていた(室橋、2016)。北大土

*豊岡短期大学通信教育部、北海道大学大学院保健科学研究院

**北海道大学大学院教育学院

***天使大学看護栄養学部、北海道大学名誉教授

曜教室では「支援者の育成を目的」(片桐、2009)とし、発達障害を持つメンバーに、それぞれの認知特性に応じた学習支援や、集団活動レクリエーションを通したコミュニケーション支援(小泉、2008;室橋、2016)が行われていた。高校生となったメンバーには、土曜日に部活などの予定が入ってしばしば欠席を繰り返す者が多かったため、実習としては機能しなくなることもあった。しかしながら、これらのメンバーに対しても継続して北大土曜教室での交流は続けたいというスタッフの考えから、高校生以上のメンバーについては別組織を作って対応することとし、2006年6月に北大土曜教室スタッフ有志によってOB会が立ち上げられた。当初は会としての名称を持たず、基本的な運営方針は北大土曜教室と同様のもので、実習生ではないボランティアを中心に運営されていた。

【中期：北大土曜教室から独立した別組織としてのごぶサタ倶楽部】

2006年度末にOB会についての話し合いがもたれ、このOB会を北大土曜教室とは独立した別組織として運営することが決まった。2007年4月14日にはメンバーやボランティアを交えた話し合いにより、「ごぶサタ倶楽部」という名称が定められた。この名称は、久しぶりに会うという意味での「ご無沙汰(ごぶさた)」に、「土曜教室(サタデー・クラス)」の「サタ」をかけるという子どもたちの提案に基づいていた。

ごぶサタ倶楽部は、個別に計画性のある活動を行っていた北大土曜教室とは異なり、メンバーとボランティアの「ゆるい集まり」(日高、2009)であった。月に1回、教育学部の教室で茶話会をしたり、ゲームをするなど、集団で“わいわい”する形式での活動が主であった。時には北大土曜教室の集団活動に参加したり、電車に乗って余市にさくらんぼ狩りをしに行ったりした。目的が明確な活動もあったが、基本的には“ただ集まる”という形を取っていた。

北大土曜教室では1名のメンバーに対して複数

名のスタッフが対応を行っていた。ごぶサタ倶楽部では、ボランティアの人数が流動的であったため、スタッフはそのような対応を行うことができず、危険などがないように見守る役割に留まっていた。日高(2011)はこの状況について、北大土曜教室では「支援者」として学習支援を行う存在であったボランティアが、「お兄さんやお姉さんの存在と一緒に活動をするようになった」と捉えている。この変化の背景には、ごぶサタ倶楽部を「支援を受ける場所」ではなく、子どもたちにとっての「居場所」として捉えることを期待するという面があった(小泉、2011;日高、2011;室橋、2016)。

【後期(現在)：土曜教室終了後、卒業後の交流の場となったごぶサタ倶楽部】

現在は、メンバーとボランティア合わせて10名程度で、2-3か月に1回の頻度で継続しており、2017年度には10周年を迎える。中期の活動では、ボランティアが「メンバーのハブ(hub)となっていた」(日高、2012)のに対して、後期ではハブとなるボランティアの参加が少なくなったことで、茶話会などを開催してもメンバー間の交流を促すことが難しくなった。そこで、地域の公共施設を利用して調理を行ったり、バスを乗り継いでパークゴルフ場まで出かけたりするような活動内容に変えていった。しかし具体的に決めたのは「何をするか」だけであり、詳細部分については当日になってメンバーとボランティアで臨機応変に決めていった。中期では“ただ集まる”ことが目的になっていたが、後期では活動内容が決まっていることで、メンバーも「〇〇をやりたいので行く」と捉えるようになっていったと思われる。年長のメンバーに全体を統括して進めるよう促したこともあり、「お兄さん・お姉さん」的存在だったスタッフ(日高、2011)に代わって、早くに土曜教室を卒業したメンバーが、卒業したばかりのメンバーをまとめる様子がみられるようになった。メンバーの年齢が中学生から社会人までと幅広くなっていく中で、具体的な活動がメンバー同士の交流

しやすさをもたらしたように思われる。また進学などで札幌を離れたメンバーのみならず、同様に札幌を離れたボランティアにとっても、忘年会や新年会が集まりに参加するきっかけになっている。これまでの活動では、メーリングリストなどを通して活動予定をボランティアから連絡しており、ボランティアとメンバーのやりとりはあったが、メンバー同士でのやりとりはなかった。現在では成人になったメンバーとボランティアの間では、連絡ツールとしてグループLINEを活用している。その結果、出欠連絡だけでなく、日常の出来事や写真を投稿する者も出てきて、活動に参加できなくてもお互いの近況を共有できるようになった。参加頻度が少なくなったメンバーにとっても、ごぶサタ倶楽部が「居場所」の一つとして存続できているように思われる。

2. ごぶサタ倶楽部の現在の役割

北大土曜教室は個別の学習支援を中心として行われてきており、集団活動も支援上の目的を持っていた。更に、事前・事後に詳細なミーティングを行い、学習支援・集団活動に関する計画とその改善案について検討していた。

一方で、ごぶサタ倶楽部においては、設立契機およびボランティア人数の限界も相まって、詳細な計画を立てることはほとんどなかった。しかし、このような活動形態であるからこそ、長期にわたって存続することができ、北大土曜教室が終了した後も断続的ではあるが継続できたと思われる。現在のごぶサタ倶楽部には、外出の機会が非常に少ないメンバーや、人と話す機会そのものがなかったり、会話の機会はあるにしても自分の好きな話題で話をするのは難しかったりするメンバーがいる。このようなメンバーにとっては、ごぶサタ倶楽部は貴重な外出や会話の機会となっている。メンバーにとってごぶサタ倶楽部に参加する理由は、長期間にわたる交流によって安心して参加できることが挙げられるだろう。また、ここでも、自分が好きな話をしやすいと期待して活動

に参加するメンバーも多いと思われる。

長期にわたり開催してきたごぶサタ倶楽部においては、参加するメンバーに入れ替わりが生ずることがある。メンバーがごぶサタ倶楽部に参加しなくなる理由として、メンバーにとってごぶサタ倶楽部そのものの必要性が無くなった、または減少したということが考えられよう。進学や就職を機に、新たな人間関係を切り開いたメンバーの中には、次第にごぶサタ倶楽部に顔を出さなくなる者もいるように思われる。しかしこのようなメンバーも、忘年会などの比較的大人数が集まる機会には時折顔を見せてくれたり、ふとしたときにグループLINEに情報を寄せてくれたりすることもある。

もともとグループLINEを活用するようになったきっかけは、大学生・社会人になったメンバーが茶話会の中でグループLINEをつくろうと呼びかけたことである。これまでのごぶサタ倶楽部では、ボランティアが各家庭(保護者)にメールを送信し、保護者がメンバーに参加の有無を確認した後にボランティアに連絡をするという形式をとってきた。そのため、自身の生活で忙しいメンバーからは回答がうまく得られないことがあり、先の予定が分からないため欠席扱いにしてほしいという連絡が届くこともあった。そして、不参加のメンバーとはなかなか連絡がとれず、活動状況も伝わらないという状態が続いていた。

グループLINEを用いることによって直接メンバーとやりとりすることができるようになり、しばらくごぶサタ倶楽部に顔を出していなかったメンバーが、「(次の活動場所に予定していた施設は)もうやってないですよ」と情報を寄せてくれるようにもなった。当日の活動の写真もグループLINEで共有することで、不参加のメンバーにも情報を伝えられるようになり、当日参加、飛び入りという形でのメンバーの参加が見られることもあった。また、これまでは見られなかったメンバー間の情報のやりとりが起るようにもなった。メンバーが主導して忘年会の日程調整のやりとりを行うこともあり、年明けには「あけまして

おめでとうございます」「本年もよろしくおねがいます」というメッセージが投稿されていた。これまでは、「お兄さんお姉さんの存在」であったボランティアがもっぱら情報を発信する存在であったが、グループ LINE への参加に対する敷居の低さによって、ボランティアとメンバー双方が情報を発信する存在になったように思われる。グループ LINE の存在が、「ゆるい」繋がりを維持することに役立っていると考えられる。

時には、長く不参加が続いていたメンバーが再び参加し始めることもある。受験などの大きな転換点を乗り換えたことがきっかけである者もいれば、学校生活で困難を感じ、安心して自分の好きな話や活動をしたいということが目的である者もいる。北大土曜教室を含めた付き合いの長さがごぶサタ倶楽部の特徴の一つであり、ちょっと疲れたときや困ったときに気軽に顔を出せる場としての存在意義があるのではないだろうか。ごぶサタ倶楽部だけで学校生活や対人関係などの困難を解決することは難しいが、疲れたときや困ったときに少し“羽を伸ばす”場所として存続し続けるのではないだろうか。すべてのメンバーが自分の「居場所」を見つけ、ごぶサタ倶楽部の役割が終わったと宣言できる日がいつか来ることが期待されるのである。

また、2015 年度より、回数こそ少ないものの保護者会も行っている。調理の作業の際には保護者の協力も得るなど、保護者とボランティア、保護者とメンバー、そして保護者同士でも繋がりが続いている。必要に応じて情報の共有がなされている点も、北大土曜教室時代を含めて長い付き合いが続いているからではないかと思われる。

本稿では、ごぶサタ倶楽部設立から現在に至るまでの経緯について述べたが、今後はさらに、個々のメンバーにとってのごぶサタ倶楽部の存在意義などについて検討を加えていきたい。

謝 辞

本論文を作成するにあたり、多くの方にご協力いただきましたことを、心より感謝申し上げます。なかでも、ごぶサタ倶楽部設立から活動を支えてくださった、小泉雅彦さん、日高茂暢さん、米内山康嵩さんに感謝致します。今回、ここにまとめることができたのも、お三方のこれまでの積み上げがあつてのことでした。また、ごぶサタ倶楽部に参加してくださっているメンバーの皆様と、ごぶサタ倶楽部の活動にご理解とご協力を頂いている保護者の皆様に感謝致します。

これからもひとつの居場所として、ごぶサタ倶楽部の活動を細く長く続けていければと思います。

引用文献

- 片桐正敏 (2009) 特別な教育的ニーズのある子どもたちへの IEP 実践の検討：北海道大学における IEP システムに基づく指導法の課題と可能性。子ども発達臨床研究, 3, 9-28.
- 小泉雅彦 (2008) “軽度”発達障害を持つ子どもたちの支援 その 3：北海道大学土曜教室の学び。子ども発達臨床研究, 2, 49-52.
- 日高茂暢 (2009) 軽度発達障害者の青年期を支える～自分とうまく折り合いをつけていくために：「友達」の大切さとともだちへの一歩を踏み出すむずかしさ～。日本 LD 学会第 18 回大会発表論文集, 152-153.
- 日高茂暢 (2011) 発達に偏りのある青年を支える～「自立」にむけたそれぞれの未来予想図の描き方：「仲間集団の相互理解を促すファシリテーターの視点から」。日本 LD 学会第 20 回大会発表論文集, 186-187.
- 日高茂暢 (2012) 居場所から準拠集団へ：「青年をつなぐハブ・スタッフ——青年の思いを翻訳し、青年の関心を接着剤にする——」。日本教育心理学会第 54 回総会発表論文集, 890-891.
- 室橋春光 (2016) 土曜教室活動の意義。北海道大学大学院教育学研究院紀要, 124, 93-105.

Abstract

“Gobu-Sata” club is the group based on the Saturday class of Hokkaido University (HU Saturday class). The club consists of graduates or undergraduates (staffs) and adolescents or adults with developmental disabilities (members). The members have continued long-term interacting with one another. The form of activity for “Gobu-Sata” club has changed through about 10 years. In this paper, the historical period of “Gobu-Sata” club from the establishment to the present, are divided into three parts, that is, (1) the period when the alumnus association was established as part of the HU Saturday class, (2) the period when “Gobu-Sata” club was established as an external organization of the HU Saturday class, (3) the period after the end of the HU Saturday class. It is thought that “Gobu-Sata” club is characterized as “loose organization” throughout in the all periods. This character may support the long-term interactions with members and volunteer staffs in “Gobu-Sata” club and contribute to the constitution of their IBASHO (a place of their own).

Key words : developmental disabilities, long-term interaction, IBASHO (a place of my own)